

<抄録>29. 歯周病患者に対する矯正治療の意義

著者名(日)	小笠原 潤治
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	21
号	1
ページ	191
発行年	2002-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008734/

3本, 下顎2本のインプラントを利用して小白歯部の咬合支持を回復すると同時に上顎3本のインプラントを固定源として上顎前歯部のMTMを2カ月行った。MTM終了後約1年2カ月の所見では経過良好であった。

2) 50歳女性 欠損歯数6, EichnerB2, 6 5 4 | 6欠損のために長年部分床義歯が装着されていた。咀嚼能率と審美性の改善のため下顎にインプラント3本埋入したが, その後右側犬歯の交叉咬合と下顎前歯叢生の改善も希望したのでMTMを4カ月行った。MTM終了後約1年の所見は経過良好だが, 今後も注意深い咬合管理が必要と思われた。

3) 30歳女性 欠損歯数5, EichnerA2, 6 2 1 | 4 6欠

損。21部は最近歯根破折等にて抜歯し, 同部にインプラントを行うことにしたが, 2口蓋側転位等の上顎前歯部叢生の改善も希望した。2本のインプラントを植立後上顎のMTMを7カ月行った。MTM終了後約8カ月の所見では経過良好であった。

【結果および考察】3症例共, MTM後のインプラントはエックス線的にも臨床的にも異常は見られなかった。インプラントは欠損歯列において確実な咬合支持を確立し, かつ矯正力に対して有効な固定源になることが示された。欠損歯列を有する成人の矯正にインプラントを用いる事は残存歯の移動に有効であると推察された。

29. 歯周病患者に対する矯正治療の意義

○小笠原 潤治
(ウィズ矯正歯科)

【目的】歯周病を有する成人患者においては, 歯列不正が歯周病の増悪因子となっている場合が少なくない。本発表では, 歯周病を有する患者で矯正治療を行ったことで, 歯周病の増悪因子の除去にもつながったと考えられる症例を経験したので報告する。

【症例】1) 33歳女性 下顎前歯部の歯石と出血を主訴に歯周治療を受けていたが, 叢生がひどく矯正治療の必要性を指摘され当院へ来院した。歯の過大による叢生症例で, 過蓋咬合を伴い, 下顎前歯には荷重負担による咬耗と破折のあとがあった。第一小白歯を抜歯してマルチブラケット治療を2年7カ月行い, 咬合の挙上と口元の後退, 清掃性の向上が得られた。

2) 39歳男性 叢生と上下前歯の唇側傾斜, 左下第二大臼歯の歯冠崩壊とその後方の第三大白歯の水平埋伏と下顎前歯の著しい歯肉退縮による根の露出があった。上顎は第一小白歯, 下顎は歯根露出の著しい下顎前歯を2本と左下第二大臼歯を抜歯してマルチブラケット治療を

行った。動的治療期間2年7カ月で, 安定した咬合と水平埋伏していた左下第三大白歯の第二大臼歯部への直立に成功した。

3) 47歳女性 歯周病と下顎臼歯の喪失により上下前歯が唇側傾斜して空隙歯列弓であった。聴覚の障害があり, 左下大白歯部には部分床義歯が装着されていた。治療はマルチブラケットにてスペースの閉鎖を行った。動的治療期間1年5カ月で, 下顎は舌側より固定式のリテーナーを使用した。保定後3年で安定した咬合を維持している。

【結果および考察】3症例すべてで清掃性が向上し, 荷重負担が軽減して歯周組織のさらなる破壊をくい止めることができた。このように, 成人の歯周病患者に対して, 歯周病の管理を行いながら, 積極的に矯正治療を行うことによって口腔内の環境を劇的に改善することができ, これによって残存している歯牙の余命を延ばす効果があると推察された。

30. 生活歯Office Bleachingの臨床成績

○斎藤 隆史, 荆木 裕司, 森清 裕士, 松田 浩一
(歯学部歯科保存学第2講座)

近年, 歯科治療における審美的要求が高まり, 特に, 前歯部の色調不良における審美的改善を目的とした治療がなされるようになってきた。審美回復を目的とした処

置は以前, 美容術と混同されがちであったが, 現在では患者の心理的治療とも考えられ, 歯学の1分野としての市民権を得ている。臨床においては, 歯の変色, 着色の